

注意事項

JのPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

#1 如月兄妹の冒険（うみねこのなく頃に編） 無期限休止

【作者名】

2段目の空き箱

【あらすじ】

機械など科学を愛する兄 きせいけい 如月 しづ 黒、魔術などオカルトを愛する妹
如月 しづ 白。

現実と非現実、ミステリー派とファンタジー派、こんな相反するの
にとても仲のいい兄妹に起こった物語。

まずは、最初の物語。

突然、死んでしまった如月兄妹。死因は外傷もなく心臓が破裂する
という原因不明の症状だった。しかも、二人同時にである。

なぜ死んでしまったのか？ 原因は、寝ぼけた神様がたまたま空間を
歪めてしまい、たまたま歪めた位置が兄妹の心臓の位置という不幸が
重なってしまったのだ。

この責任を取るために神様のとつた行動とは？

初めて小説を書きます。文才もなく、誤字もおおく、設定もめちゃくちゃかと思いますが。少しでも興味を持つていただけたら嬉しいです。

やる気の続く限り、続ける予定ですし、いろいろな作品をしようと思っています。

不定期更新になってしまふかも知れませんが、よろしくお願ひします。

もう一つのほうに力を入れているため無期限休止にします。もし分けないです

#1 ある存在との出会い

? 「やれじやあ、行つてらうしゃー!!」
「

黒・白 「おひ(いさ)、行つてくる(ね)!!

……まずは、唐突に始まったことを謝りたいと思へ。
なぜ、こんなことになってしまったのか。それは、1時間前くらい
にさかのまぶ。

1時間前

「」は如月家。なんの変哲もない、普通の家。そんな部屋の一室に
兄、如月 黒とその妹、如月 白は、ある討論をしていた。内容はオ
カルトと科学についてである。兄の黒はオカルト派、妹の白は科学派
であった。

勘違いしないでほしいのは、喧嘩をしてくるわけではなく討論をし
ているのである。たとえば、ミステリーとされているものを黒が科学
的に説明したり、白が科学では証明されていないところを指摘したり
しているのだ。

科学とミステリー、「」は相反するものではあるがこの兄妹は、な
ぜか仲がものちじへっこなのである。これは、お互に認め合っている
からである。

今日も、そんな討論をやつていた。

黒 「いや、それは証明することができます」
白 「じゃあ、やつてみてよー。」

「とにかくじでこつも通つやつてこぬと、一人の意識は急に飛んでしまつた…。

（黒 s.t.d.e）

黒「……うーん、じりじめ？」

それは、真っ白な部屋だった。
なにもない、ただただ真っ白なだけの部屋。

黒「確か、自分の部屋で白と……！　白せどいだニ！」

そう大きな声を出すと、近くで「う、うーん」と聞こえた。
そつちのほうを見ると白が倒れていた。
慌てて駆け寄つて声をかける

黒「白ー無事か！」

白「うーん……、兄ちやん？」

白は白を覚ました。とつあえず一安心してこねと。

白「じりじめどいなの？　わつあまで兄ちやんの部屋にいたの？」

やうなのだが、わつあまで俺は自分の部屋にいた。なのこ、いきなり
「ん何もなし白に部屋にこむのだ。全く訳が分からぬ。

やうしてこゑひに、聞きなれない声が聞こえてきた。

? 「やあやあ、僕の部屋にいらっしゃい！」

あいつは、誰だ？ 少なくとも会ったことはないはずだ。聞いた覚えのない声、見た覚えのない顔、俺からしてみたら明らかに不審者であつた。

そんなことを思つていると、白があいつに話しかけた。

白「あなたは誰ですか？」

? 「よく聞いてくれた。僕の名前は『キリ』、神様だ。ああ、神様だからといってかしこまる必要はない。気軽に呼び捨てにしてくれていい。僕は君たちを歓迎するよ、如月兄妹！」

黒「ほうほう、神様か……ってそんなわけあるか！」

白「ほんと!? 神様なの!? 初めて見た!!」

俺と白は同時に違う反応をした。

#2 お決まりの展開

キリ「あらあら、いひな息を合わせて『そんなわけないだろー』って突っ込んでくれるといひじゃないのかい？お約束だろ？」「

黒「白はオカルトが大好きだからな、いひこいつ話はすぐに信じちゃうんだ。だから、あんまりからかわないでやつてくれ。で、本当は何者なんだ？」

キリ「僕は正真正銘、神様さ！」

黒・白「じゃあ、証明してみせろ（てよ）！」

俺たちがそつにいと、キリは「わかつた」といつていきなり姿を消した。すると、いの真っ白で何もないこの部屋が光だけで、気付いたらちやぶ台や戸棚などが置いてある和風の部屋になっていた。相変わらず部屋の色はまっしづだが。

…「これにはびっくりだ

キリ「これで、わかってもらえたかな？」

白「え、ちょ、す、ほんとに神様じやん!!」

黒「…これは何のトリックだ？」

キリ「…………トリク？ 黒は何を言つてるんだい？ これは正真正銘、僕がたつたいましたんだよ。」

黒「そんなものは、あの光つている間に仲間を呼んで、手分けしておけばいいだけだ。お前が『神様』といひ証明にはなつていない。」

キリ「全く、まさかこんなに疑われるとはね。それに白のよひ、信じてみたらどうだい？」

黒「あいにくだが、俺は白のよひ「オカルト派」ではなく「科学派」なんでね、現実ではできないようなことをしてら『神様』って認めてやるよ。現実でできるところの可能性が残るしあは信じる」となんてできないなあ。」

俺は、できるものならやってみると思い、にせにせながらキリという人（？）に行つてやつた。

するとキリは、苦笑しながら「わかったわかった、ひとつを私のやつを見せてあげるよ」とこいつ。俺と白の肩をつかんだ。

…こいつの間に、ここには俺たちのやつまで来たんだ？

わつあまでは手の届く範囲にあいつはいなかつたはずだ。それに違和感を感じながらも黒はにやにやしながら「じゃあ、みせてみる」と、白はとてもうれしそうに「ほかにもなにか見せてくれるの!?」といつた。

キリ「じゃあ、行くよー」「とある魔術の禁書目録」の世界より引用、「白井 黒子」の超能力『空間移動!』を発動！』

あいつがそういうと、俺たちはどこかの草原に移動した。そう、俺はとつさに移動したと理解した。
もはや、移動といつよつ転移とかワープとかしかやつたんじゃない
かと思つた。

キリ「その通り、君たちは転移やワープと書われるたぐいのものを使つてここにやつてきた」

黒「ついで、心まで読まれちゃつたよ……」

白「もづ、何でもありだね！」

キリ「まあ、やつこうことだ。わかつてもらえたかな？」

そういうと、元の何もない白いだけの部屋に戻つていた。あれは、この白い部屋に草原の映像を映しただけじゃないかとも思った。

…しかし、そんなことなことは自分がよくわかつてこるはずだ。そんなものを映し出すような機械もなかつた。それ以上に草の感触が本物だったのだ！ これは、認めるしかない。

キリ「どうやらわかつてくれたようだね。それじゃあ改めて自己紹介と行こうか。僕の名前は『キリ』。向の変哲もない神様さ」

黒「じゃあ、俺たちも自己紹介をしよう。俺の名前は『如月 黒』。14歳の中学生だ。ちなみに俺は「科学派」だ」

白「私の名前は『如月 白』。12歳の小学6年生です。兄ちゃんとは違つて「オカルト派」だよ!」

ちなみに、黒はローブのようなものを着ていて、白は白衣を着ている。派閥からして逆ではないか?と思つかもしれない。これは、俺たち兄妹の間で決めているルール『お互いを尊重する』によって、科学とオカルトの討論をするとき黒は「オカルト」「白は「科学」の格好をするためである。討論をしていくときはこの格好でしてしまったため、この格好なのである。

俺はこの格好が嫌いじゃない。むしろ気に入っているくらいだ。それは白も同じようなので、最近では討論とかにかかわらずこの格好をしてくる。

キリ「それじゃあ、自己紹介も終わつたところで話をしよう。いい知らせと悪い知らせと君たちが絶対にキレる知らせ、どちら先に聞きたい?」

黒「3つつの選択肢が気になるが、キリが話しやすい順番で話してくれ」

白「私もそれでいいよ」

キリ「よつやく名前を呼んでくれたね。それじゃあ話そつか

#3 兄妹の死因

キリ「じゃあ、まずは悪い知らせから」

キリはそう言つと、一呼吸おいてから俺たちに話し始めた。

キリト 簡潔にいうと、君たち兄妹は死んでしまいました

黒・白二え？」

黑：「滾滾滾滾滾滾滾滾滾滾！」

黒「じゃあなんで俺たちがこんなことになるんだよ!!」

いじやなー!!

「だし」

まさか、死んでしまったとは。討論しているときに急に意識が飛んだのは死んでしまったからか。ソーカ、ナルホドナー。

黒「つて、信じられるかああ!!」

白「ていうか、心臓が爆発するってどんな病気!?」

キリ一あ、病氣とかしやなしよ?

キリ「ここで、君たちが絶対にキレる知らせだ」

俺たちはキリが話し出すのを待っていた。すると、キリがとても申し訳なさそうな顔で「実は僕が原因で君たちの心臓が爆発しちゃったんだよ…」と言つた。

黒・白「なにしてくれてるんだ（のよ）!!」

キリ「本当に申し訳ない…」

黒「いやいや、そんな申し訳なさそうに謝つても…俺たち死んじやつたんだからね!?」

白「全く自覚ないんだけどね!!」

キリ「意外と明るいなあ…、死んじやつたの？」

黒・白「お前が言うな!!」

キリ「息もぴったりだし…、あ、それはしょうがないのか…」

黒「ん? どういうことだ?」

白「兄妹だから、息ぴったりなのは普通だつて」と?

俺たちがキリの言葉に違和感を持つてると、キリは泣きそりな顔で「「いめんなせこ…」と言つてきた。…これは相当に厄介なことをしてしまつたらしい。

黒「何をしちゃつたか言つてみる。怒らないから」

白「もう、死んじやつてしまつていわれたから滅多な」とじや驚かないと思うよ?」

キリ「…わかつた、話そつ。僕のせいでの死んじやつたってのはわかつたかい?」

俺と白はうなづいた。

キリ「その理由つてのが、僕が寝ぼけて空間を歪めるようなことしちゃつたのが原因なの。それで、その歪めちゃつた場所つてのが君たちの心臓の場所、そこを歪めちゃつたから爆発しちやつたんだ…」

黒「なんだ? つまり俺たちは、寝ぼけたお前のせいでの心臓を捻り潰されたってことか?」

白「…………理不尽」

キリ「本当に申し訳ない…。でも、まだ謝らないといけない」とがあるんだ」

白「これ以上にやつちやつたの?!」

黒「こいつ本当に神様なのか？　こんなに問題起こしていいのか？」

キリ「そう、これは重大な問題なんだ。寿命を迎える前の人間を二人も殺してしまったからね。さらに悪いことに、僕は寝ぼけていたから、すぐに気付くことができなかつた」

白「そうなの？」

キリ「うん、僕が気付いたのは殺してしまってから2日後だつたんだ」

黒「ずいぶんと放置されてたんだな……」

キリ「いきなり、ほかの神様が10人くらい乗り込んできたときは『なにがあつたんだ？』って思うくらい自分でやつたことに気づいていなかつた」

黒「寝ぼけてたなら覚えてないこともあるか……」

キリが「ずいぶんと物分かりがいいね？」と言つてきたので俺は「いろいろありすぎて頭が追いついてないだよ」と答えた。

キリ「それで、ほかの神様たちに『これは大問題だから自分でなんとかしろ！』っていわれたから、急いで助けようとしたけどもう2日もたつっていた。人間を蘇生するためには24時間以内に処置をしなければ無理なんだ。できたら、何日後かに生き返ることができるんだけど……」

黒「2日もたつてたからそれができなかつたと？」

俺が言つとキリは「そりなんだ……」と申し訳なさそうに言つた。そこで当然の疑問が浮かんでくる。といつか最初から浮かんではいたんだが……。とりあえず聞くか。

#4 一人で一人？

黒「じゃあ、なんで俺たちはここにいるんだ？ 死んじゃったなら意識なんてないんじゃないか？」

俺がそういうとキリは「そう、本題はここからなんだ」と言つたので黙つて聞くことにした。

キリ「蘇生することはできなかつたんだけど、奇蹟的に魂だけはまだ残つていたんだ。だから僕は一人の魂が少しも欠けないようにな部集めることにしたんだ」

白「それで？」

キリ「一応、欠けることなく集めることはできたんだけど……。二人の魂は一つになつてしまつてたんだ！」

黒「……どういうことだ？」

キリ「僕にもよくわからないんだ。魂は一つしかないのに君たちという一つの人格・精神・思考、つまり一つの魂に一人いるってことだ。こんなことは普通に考えてありえないことなんだよ」

黒「白、そういうものなのかな？」

白「そういうものだよ、兄ちゃん」

黒「じゃあ、仮に魂が一つになつてたとして、今の俺たちはなんでもわかれているんだ？」

キリ「ここは僕の部屋だからね。二人の精神を具現化させているんだよ。でも、僕が具現化をやめてしまつたこの部屋を出てしまつとうぐに一つになつてしまつ」

白「切り離すことは、魂が一つしかないできないんだよね？」

キリ「そう。さらに、なぜかすぐ適合してゐみたいだから無理やり離すこともできないんだ……」

知らないうちに厄介なことに巻き込まれていたみたいだ。そう

思つてはいるとキリはさらにに続けた。

キリ「それじゃあ、最後いい知らせ……

君たちを転生させます」

黒・白「マジで!?」

キリ「でも、さつき言つた通り一つの魂しかないから一人しか転生できないんだ」

黒・白「ええええええ!!」

キリ「そう先走るな。言つたろ? なぜか適合してゐるから無理やり離すことができないって」

白「じゃあどうするの?」

キリ「こまま転生したとしたら、一重人格みたいになる。それでいいか?」

黒「俺は別に構わないけど、白は?」

白「私も構わないよ？」

キリ「ほんとに驚かないね…、まあいいか」

キリがそうこうと「いやせん」と一つ咳をして、また話し始めた。

キリ「「こんな」とになってしまったのは僕のせいだからね。いくつか特典をあげようと思つんだ」

黒「ドンナスゴイモノヲクレルンダロウナー」

白「タノシミダナー」

キリ「そんなに棒読みじゃなくてもいいじゃないか…」

ちよつと意地悪を言つてみると、すいしに落ち込んだ。「れくらいの」としても覗はぬたらぬだらう。なぜなら、神様であるキリに殺されているからな。

：ほんとにすゞことになつてゐるな。漫画とかラノベとか一次創作の主人公みたいだ。

キリ「まあいいさ。特典は全部ぐっつあります」

黒「結構もらえたんだな」

キリ「一つ用は、今の魂に合つた肉体です」

白「私たちのどつちかの肉体じゃダメなの？」

キリ「一回死んでじやつしてね（心臓つぶれてるし）、魂が一つになつて変つちゃつたからどつちの肉体にも合わないんだ。だから、その魂に合つた肉体を君たちのオーダー通りに作つてあげる」

黒「マジか！」

白「どんな風にしようかな!!」

#5 能力と世界

俺と白の話し合この結果「男とも女とも見れる中性顔の男の子（14歳）でかつこよすかわいすぎずの中途半端な人、身長は163cmとちょっと小さめ、服装は今の黒と白の格好を気分で変える」ということになった。ちなみに話し合には2時間にわたった。

キリ「それじゃあ、そういう風に造るからね」

いきなり部屋が光つたと思ったら、一人の人気が立っていた。

黒「まあ、いいんじゃないかな？」

白「問題ないね」

ちゃんと要望通りだつた。これがこれから体になるつてのは複雑だが…。

キリ「じゃあ二つ目。この体にいろいろと能力を付^{スキル}しそうと思^う」

白「これは、私たちが決めてもいいの？」

キリ「いや、これは僕が決めさせてもらひつ

黒「なんでだ？」

キリ「あんまり最初から人間離れした能力だと面白くないからね
ぐる「そ、そうか……まあいいけどさ」

キリが言うには「努力すればするほど伸びる、表に出す精神を自由に変えられる、心の中で黒と白が話すことができる、神様^{キリ}と連絡をとれる」というものだった。

白「表に出す精神を自由に変えられるってどういったこと？」

キリ「一重人格みたいになるって言つたら? 黒が体を動かすか白が体を動すか、黒が話すかしろが話すか、いつこののが自由に決めるつてことだよ」

黒「こいつの体は男なのに、白が出たら大変そうだな…」

キリ「まあ、そこはうまくやつてくれ」

白「兄ちゃんが独り占めとかは許さないからね!」

黒「わかつてゐよ、白のことを悲しませるよつなことするわけないだろ?」

白「わかつてゐならいこいんだよ!」

「こんなことを話していると

キリ「君たち本当に兄妹かい? イチャイチャしてゐるカップルにしか見えなかつたんだけど…」

黒「何言つてゐんだ? 兄妹なんだから普通だろ?」

白も『何言つてゐの?』みたいな顔をしていた。キリはびっくりした顔をしたと思つたら、ため息をついて「だから適合したのか」みたいなことを言つていた。よくわからん

キリ「じゃあうつ田だ。君たち一ツずつ能力をあげよ! ^{スキル}」

黒・白「やつたあ!!」

キリ「結構何でもできるからね? でも最強にしてとかはだめだからね。あと、一つの体に入るんだからお互いの能力は使つことができるからね」

白「つまり、合計して2つ^{スキル}能力を使うことができるってことだね?」

キリ「そうね、そういうことだよ」

黒「俺はもう決まつた。白は?」

白「私はまだだから、兄ちゃんが先に言つていよい?」

黒「じゃあ遠慮なく、「自分・相手・ものなどすべてのステータスを見る」ことができる能力^{スキル}」がいいんだができるか?」

キリ「それくらいならできるね。表示する項目を選ぶ」ともできる

よ」

黒「マジか！ ちょっと考えるから待つてくれ」

俺は能力^{スキル}をもらえるって聞いたときに、ぱっとと思い浮かんだのがこれだつた。理由は『この状況が漫画やラノベや一次創作みたい』と思つたからだ。この流れだと転生する世界とかも決めれそうだなって思つたんだ。……厨^一の考え方だな』

この流れをわかっている我が妹ならこれに相性ピッタリなやつを選んでくれるに違いない！

白「私も決まつたよ。今兄ちゃんのやつを聞いて思いついたんだ！」

キリ「いいよ、何でも言つて」

白「それじゃあ、「相手に触るとその人の能力^{スキル}を模写^{コピー}して使用、また完全に保持できる能力」がいいです！」

さすが我が妹！ わかつてるじゃないか！ これで了承されれば、どんどん強くなることができるじゃないか！ あとはキリがいつて言つつかだな…

キリ「…………まあ、いいか」

白「ありがと！」

黒「項目がきまつたぜ」

キリ「どんなのにするんだい？」

黒「名前・性別・年齢・レベル・状態・身体能力（数値化）・精神能力（数値化）・称号・所持能力^{スキル}」でどうだ？」

キリ「それくらいならいいと思う、項目の詳しい内容も設定するかい？」

黒「じゃあお言葉に甘えて「身体能力 体力・魔力・物理攻撃・魔法攻撃・物理防御・魔法防御・俊敏性、精神能力 精神力・知能・運、

所持能力^{スキル} 通常能力^{パッシュスキル}・行動能力^{アクティビスキル}・固有能力^{コニーカクスキル}」だ

キリ「…なんでそんなに具体的に決められるんだ？」

白「兄ちゃんは厨一病だからね、しようがないよ」

黒『備えあれば悪いなし』って言葉知ってる？ 何かあつた後じや

遅いからね、それに情報に勝る武器はないからね

キリ「わかつたわかつた、それでいいだろう

黒「ありがとさん」

キリ「しようがないからもう一ついいことを教えてやろつ。『どの世界でも全員が能力^{スキル}を持つている』、『ただし、固有能力^{コニーカクスキル}は誰でも持つているわけじゃない』

白「そんなに教えても大丈夫なの？」

キリ「半分やけくそだけどいいんだよ。君たちに迷惑をかけたお詫びさ」

黒「まあ、感謝してやるよ」

白「兄ちゃん口悪いよ……キリ、ありがとね」

キリ「それじゃあ、最後に転生する世界^{ストーリー}を決めてもらひ

黒「どこでもいいのか？」

キリ「黒のことだし、このことを考えて能力^{スキル}を決めたんだろう？」

黒「なんだ、ばれてたのか」

キリ「最初から決めてた」とだからどいでもいいよ「漫画でもラノベでも一次創作」でもね、まあ一次創作に關していえば今はまだ無理なんだけどね

黒「なんでだよ？」

キリ「まあ、神様の事情つてどこかな」

黒「まあいいや、一緒に決めようぜ白一」

白「私は「オカルト系」と「科学系」のどちらもある世界がいいな

？」

黒「対立してるほうがいいか？共存してるほうがいいか？」

白「対立してるほう！ 私たちはその状況を傍観してたまに茶々を入れる第三者みたいな立ち位置になれる世界がいいな」

「

俺と白は漫画やラノベや一次創作が大好きだからいろいろ知つて
いる。だからこそ、こんなに迷つているのだ。

キリ「ああそりそり、転生した世界が終わつたら、ここに戻つてきて違う世界に転生しなおせるからね、これも大大大サービスだからね」

白「やつたね！ キリつたら太つ腹だね」

今日は白の機嫌がいつもまして良いな。
俺たちはいくつか候補を出すことにした。

#6 謎の『登場人物』

いくつか候補が出た。「とあるの世界、うみねこの世界、マギの世界」の3つが候補としてあがつた。

黒「じゃんけんで勝つ人が決める」とじょうばせ、白「私はそれでいいよ」

黒「じゃあ行くぞ！」

黒・白「じゃーんけーんぽん！」

結果は白が勝った。

黒「負けたか…」

白「やつたー！ どれにしようかなー」

10分ほど悩んだ後、

白「うみねこの世界にするーー！ 赤と青の言こと合ひ」つてやつてみたかったんだよねーー」

キリ「じゃあ、そこに決定ね」

黒「まあ、いいんじゃないかな？」

キリ「そうそう、一個わすれてたことがあった！」

白「どうしたの？」

キリ「肉体の話なんだけど、名前と髪と瞳の色を決めてもらつてないのさ」

黒「名前も決めないといけないのか」

白「どんな名前がいいかな？」

キリ「できれば、苗字はそのまま名前だけ変えてほしいんだよねーー」

黒「なんだ？」

キリ「苗字は君たちを繋ぐ大事な要因だから、勝手に変えれないん

（アクター）

だよ

白「そういうことね」

黒「じゃあ苗字に合つた前を考えないとな」

白「さつまは私が決めちやつたから、次は兄ちゃんが決めていいよ？」

黒「じゃあ…………夜音^{やのん}、白と黒から暗い空と明るい星やつきで『夜』、最初の物語から『音』。どうせ新しく始まる人生だから名前も一番最初の物語^{ストーリー}に合わせたほうがおもしろいだろ？」

白「夜音……いいんじゃないかな？」

キリ「じゃあ『如月^{きさらじ}』^{夜音^{やのん}}で決定だね」

白「あとは、髪と田かあー」

ちなみに俺は黒髪黒田、白は白髪黒田、白の髪は生まれつきで白かつた。理由はよくわからぬいらし。白はこの髪の色が気に入ってるみたいだし、周囲も気にしないみたいだからいいのだろつ。まあ、今となつては関係ないことだけどな。

： そういえば、神^{キリ}については何も紹介してなかつたな。服はいかにも神様つてかつこうして、髪と田の色は金色だ。どうちかつて言つたらかつこいい部類に入るんじゃないだろつか。

黒「どうせだから厨^{くり}っぽくしたいなー。転生するといつも異世界

なんだしさー！」

白「虹彩異色^{オッドアイ}とか？」

黒「そうそう、そんな感じで」

白「片方は私たちと同じ色の『黒色』にしない？」

黒「それは俺も考えてたんだ、あとはもう片方の色なんだけどなー」

白「じゃあ、キリの田の色でいいんじゃない？」

黒「『黒×金』かー、まあいいじゃないか？」

キリ「髪の色はどうある？」

黒「どうせだから、俺と白の髪の色を使いたいよー」

白「合わせたら『灰色』になるけど、インパクトに欠けるから『黒

と白のメッシュ』とかは?」「

黒「それだ!!!」

キリ「じゃあそれで設定しちゃうからね??」

黒・白「お願い...」

キリ「わかったよー。それじゃあ.....ほーーー」

また、白い部屋が光つたと思つたら、そこは要望通りに変わった

『如月 夜音』の姿が。

...いい感じに厨一病の格好だな。

キリ「それじゃあ、そろそろ異世界に飛んでもらひますよー。」

黒「ああ、いろいろと貰つて悪かつたな」

白「ありがとな、キリ！」

キリ「いや、元は僕が悪いんだ。謝らないといけないのは僕のほうだよ。ほんとに申し訳ないね」

黒「いやいや、確かに死んじやつたのはショックだし、理由も理不^ふだからイラッとするよ? でも、いつもつていろんなものももらつて、一度は夢見た異世界に白と一緒に行なるのは結構うれしいだぜ?」

白「たしかにこれからは兄ちゃんと一緒にいろんな世界ストーリーを旅できるんだから気にする」となことよ

キリ「...そうか、ありがとな」

キリはキリで結構自分でやっちゃつたこと気にしてたんだな。でも、やつちやつたことは仕方ないんだから責めつたってしようがない、責めるくらいだつたらこれからも長い付き合いになりそつだし、こぢりざをなくして仲良くするほうがいいに決まつてるからな。

「ひつして、冒頭に戻るのであった。

キリ「それじゃあ、行ってらっしゃい!!」

黒・白「おひ（いは）、ひびく（ね）」

キリ side

キリ「行つちやつたか、でも本当に申し訳なことしちやつたな…」
？「あいつらがいって言つてゐんだからこいんぢやないか？」
キリ「…いたのか」
？「当たり前だろ？ なんたつて…」

お前の中に入らんんだからな

キリ「やつだつたな」

?「そうだ、俺にも体くれよ。俺だつたらお前から無理やり切り離しても問題ないから」

キリ「!!! そだつたのか?」

?「当たり前だろ、俺とおまえは『絆』で結ばれてるわけじゃない。俺が勝手にお前の中を借りてるだけだからな」

キリ「じゃあ、体を作つたらそつちに移つてくれるのか?」

?「ああいぜ? いろいろと条件は付けさせてもうひさびな?」

キリ「…何がほしい?」

?「話が早いじゃないか まあは、『どの世界^{ストーリー}にも瞬間移動できる能力^{スキル}』と『世界^{ストーリー}の中で瞬間移動《ワープ》できる能力^{スキル}』がほしい」
キリ「!! まさか、あの子たちを追いかける気じゃないだろうね?」
?「いや、そういうわけじゃない。ただ、パンチになつた時に駆けつけられるようにな」

キリ「??? なんでそんなことするんだ?」

?「…それは秘密」

キリ「まあ、見てるだけで余計に手出しをしないつて言つならいいだろう」

?「それでいいよ」

キリ「それで、体はどんにするんだ?」

?「基本はあの子たちにあげた体と一緒にいい。皿と髪の色は『黒』で服装は…浴衣かな?」

キリ「わかった、浴衣は何でもいいのか?」

?「できれば『黒』がいいかな、全部同じ色で統一したいから

キリ「わかった、これでいいんだな」

僕はそういうといわれた通りの体を出してあげた。もちろん言われた能力もつけてね。

? 「ありがと、これで自由に動くことができるよ」

彼はそういうと僕の中から出て行って、作ってあげた体の中に入つていった。なぜわかつたかといつと、そんな感じがしたつてだけだ。

キリ「やつと、出て行ってくれたか

? 「ああ、悪かったな」

彼は、体の感触を確かめるように軽く動きながら謝つてきた。
… そういえば彼は何者なんだろ？

キリ「そういえば、まだ何も聞いてなかつたな。お前は何者だ？」

少し殺氣を出して言つた。…が、彼はもろともしてないよう

? 「俺か？ 僕のことが知りたいのか？」

キリ「!! 普通の『人』なら、氣絶するくらいには殺氣をだしてゐるはずなんだけど？」

? 「ああ、だつて俺、人じやないし

キリ「俺たちと同類つてことか？」

? 「いやいや、それよりも上に存在してゐる者つて感じかな」

キリ「!? 僕たちよりも上だと？」

? 「そつそつ 一つ言えることは…『ここ』には俺に勝てる存在はない『つてことかな』

キリ「ほんとに句者だ？」

? 「そうだなー、しいて言つながら

俺の名前は『2段田の空き箱』ってことかな

-

#7 重要人物との出会い

「黒 side」

黒（俺たちは、ちゃんと転移てんいできたのか？）

白（できたんじゃないかな？）

心中で白の声が聞こえた。同じ体の中にいるんだから当然といえば当然だし、キリも言つていたからな。

黒（最初に表に出ているのは俺つてことか）

白（とりあえず声を出してみたら？）

黒（やってみるか）

夜音「あ、あ、僕の名前は如月おれのかづき」 夜音、『科学』と『オカルト』の2つをあわせ持つ者である

白（…兄ちゃん何言つてるの？）

黒（いいだろ？ 厨二病みたいな格好してるんだし）

? 「其方は何者だ？」

黒・白（!!）

後ろのほうから、いきなり声をかけられたのでびっくりした。振り返つてみると…

夜音「ベアト……リー・チH!!」

ベアト「ほう…妾のことを知つてては本当に何者だ？」

夜音「知つてるも何も有名人だからなあ～」 [黄金の魔女ベアト・リー・チエ] さん

「ベアト「だから何者だと聞いておる!!」

夜音「ああ、僕の名前かい？」 如月おれのかづき 夜音つていうんだ。心配しなくとも「福音家」は何も関係ないよ」

ベアト「福音家」の」とまで!! 貴様は妾の『駒』ではないな?
じゃあ、誰の駒だ…」

黒(しまつたなあ、まさかこんな重要人物に先に会つてしまつとは思わなかつた)

白(わあ! 本物の魔女だ! 握手したーい)

夜音「…とりあえず、握手してもらつてもいいかな?」

ベアト「あ、ああいいぞ?」

夜音_(俺)はとりあえず魔女であるベアトと握手した。

俺はそういうこ_(ス)とと思って、キリからもらつた能力を使おうと思つた。…だが、発動方法を聞くのをすっかり忘れていた!

黒(白! 早急にキリと連絡をとつて…連絡の取り方わかるか?)
白(さつき、キリが私に教えてくれたよ? どうやって私にだけ伝えることができたのかはわからないけど)

黒(じやあ連絡を取つて俺の能力を使つ方法を教えてもらつてくれ)

…)

白(了解!)

ベアト「おー! いきなり黙つてどうしたのだ?」

黒(や、やっぱ…)

夜音「ビ、ビ! どうした?」

ベアト「いや、いきなり黙つてしまつたからどうしたのかと思つてな」

夜音「ああ、悪い、ちょっと考え方をな」

白(兄ちゃん、わかつたよ! 相手を認識した状態で
[能力観覧図鑑]_(ブック・オブ・ステータス)と言つか、念じることで発動できるみたい!)

黒（さんきゅ！「**能力閱覧図鑑**」!!）
[ブック・オブ・ステータス]

名前：ベアトリーチエ

別：女

年齢：???

状態：普通

問鍊金術師

身体能力

体力：

魔力：

物理攻擊：

魔法攻擊：

物理攻撃：

魔法防御：

俊敏性：

知能運：

精神能力

通常能力

パッセンジスキル
アクティブラスター
行動能力
〔魔女化、蝶化（黄金の蝶）〕

パッセンジスキル
アクティブラスター
運動能力
〔赤き真実、青き真実、黄金の真実、思考理論〕

パッセンジスキル
アクティブラスター
固有能力
〔魔法：無限、黄金、召喚〕

称号：黄金の魔女、無限の魔女、ゲームマスター、右代宮家顧

黒（冒険・戦闘系の世界じゃないから身体能力と精神能力は表示されないのか）
[ストーリー]

夜音「ほう、本当にできたな」
ベアト「…?? なにができたというのだ？」

夜音「何でもないよ」「ゲームマスター」さん？」

ベアト「!!なぜそのことを!?」

夜音「ついでに言うと、あなたの正体も知っているよ」「やめなさい！」

ベアト「!!その口ぶりから、嘘じやないとは思つがだからと言つて信じることもできない」

夜音「じゃあ、どうすればいいんだ？」

ベアト「赤き真実を使って、発言できるといつなら、信じてやってもよいぞ？」

白（…………）

・俺は白からいことを聞いてしまった。

夜音「それじゃあ、『赤・僕はベアトリー・チヨの正体を知つている』『ベアト!!!!!! どうしてだ！なぜ、貴様が使える!!』

夜音「なぜかつて？『赤・僕はこの物語の結末を6つ知つている。7つ目と8つ目は途中までだが知つている。僕はこれから起きてそのepisodeを大体理解している。その中でお前の正体を見破つた』といふことだ」

ベアト「ばかな！貴様は未来から来たとでもいうのか!!？」

夜音「未来じゃないよ……この世界の上から来たのさ。このメタ世界よりも上、観劇者よりも外から来た存在つてどこかな？」

ベアト「……これだけは聞きたい。お前は、こっち側・か？それとも……」

夜音「俺はどっちでもない。中立の立場だよ。まあ、元人間としては、二ングンのまつにまつとは口出しをするかもしれないけどな

」

ベアト「厄介なやつだ……」

夜音「大丈夫だ、お前の邪魔をする気もないし、長くこっちにいる気もない、ふらふらしていなこときもあるだらうしな。だが、お前の邪魔だけはしないと約束しよう！」

ベアト「なぜだ？」

夜音「人の作ったものを壊すのは僕のルールに反するからね。なんだったら、『赤き眞実』で言おうか？」

ベアト「……いや……。お前のことは言つべつ『ひみつ』だよ！」

夜音「ありがと、実際、僕はお前のこと嫌いなわけじゃないからな。お前にもいい方向に口出ししつゝは思つてるよ。最後までは絶対にいなければ」

ベアト「妾がこれからじょんじつしてるとても、お見通しつゝとか」

夜音「そういうこと」

ベアト「まあ、これからよろしく頼む」

夜音「うううううう。僕のこと楽しませてね」

Side out

白 side

数分前に遡る…

私は白。今は兄ちゃんが表に出てるから暇なんだよね。

あ、キリからの連絡だ…なになに？ そうか、キリと話すためには普通に心の中で念じるだけでいいみたい

兄ちゃんから、頼まれたからさっそくキリに連絡してみる。

……りょうかーい。わかつたよ、じゃあまた連絡するね

暇だから、いろいろ得な情報を聞いたやつた いつ、兄ちゃんに伝えようかなあー

あ、兄ちゃんがベアトに言つ詰められてるね。さつき、『夜空』^{やのん}がベアトと握手したときに、私の能力「模範模写」^{スキル[スキン]}^{スキン[コピー]}を使ってベアトの能力を全部『コピー』しちゃったんだ さつき、キリから聞いたんだけど、相手がちょっとでも『負けた』と感じたり『屈服』したりしたら称号も『コピー』できるらしい。一部の称号は条件を達成しないとダメみた

いだけど…

由(やつ)も私の能力^{スキル}でベアトの能力をコピーしたから、「赤き真実」
を使えるよ)

あら、お兄ちゃんはいろいろバラしちゃったみたいだね。しかし
も、ベアトと友達になつたみたい。

…その「私が私も表に出してもいいお

#08 入れ替わり

side change 黒

ベアト「さて、これからどうじょうか」

夜音「ゲームを始めるんじゃないのか？」

ベアト「ゲーム？ ゲームならもう始まつとるわ？」

夜音「え!? もう始まつてたの？」

ベアト「ていうか、ホンディングに近ことここまで来とるわ？」

夜音「まあ、俺が参加するタイミングは今じゃなかつたからいいんだけどわ」

ベアト「本當にお前はこれから起じることを知つてゐるみたいじゃな？」

夜音「少しくらい妻に教えてくれてもいいんだぜ？」

夜音「そんなアンフュアな」とするわけないだろ？ 誰にもこれから起じることは教える気がねえ

ベアト「けち臭いやつだ」

夜音「何とでもいつてやがれ」

白（そろそろ私も外に出してほしいな？）

黒（悪い悪い、いいけど交代するまつまうがわからないぜ？）

白（キリから聞いてるよ！ 普通に「交代」^{チエンジ}って念じればいいみたい）

黒（わかった……「交代」^{チエンジ}!!）

ショウヒーンシマシタ。

どつかから声が聞こえたと思ったら、急に体が軽くなつたような気がした。…声が出せなくなつてこるつてことは表に出るのを交代したことだろ。

side out 黒

side 白

白（お、体が動かせるようになつてゐ 成功したみたいだね）

私は、手を閉じたり開いたりしながらやつと思つた。

ベアト「夜音？ どうした？」

夜音「いえ、何でもないわよ」

ベアト「……え？」

黒（白!! 口調がおかしい!! もう今までと全然違つからベアトが
すこしいに感つてる!!）

白（しつぱいしつぱい）

夜音「じめんじめん、どんな反応をするかからかったんだよ」「

ベアト「そ、そつか。いきなり口調が変わったからびっくりしたぞ

？」

夜音「じめんじめん、もうしないからね それでなんの話だっけ

？」

ベアト「ああ、これからびつあるかつて話だ」

夜音「それならとりあえずベアトについていくことにするよ。もう
そろそろHONDYINGが近づいてことは、最終決戦つてことでしょう?
見に行きたいな」

ベアト「連れていくのは構わないが、お前のことをなんて説明しよ
うか…」

夜音「じゃあ、僕に魔女の称号でもつけてよ。ここに迷いつこんだ
魔女つてことで説明すればいいんじゃない？」

ベアト「それが、手取り早いか…どんなのがいい？」

夜音「それはベアトに決めてほしいな」

ベアト「じゃあ…「万能の魔女」ってことかあ？ 実際に妾の知

る限り未来までわかつてゐやつはいなし、魔女でもないのに「赤き
眞実」も使つてゐし」

夜音「万能の魔女」か…かつこじこー…あつがと、ベアト」「
ベアト」氣に入つてもううえたよつで何よつだ。それじやあそひや
行くぞ」

ベアトはそういうと黄金の蝶になつて飛んでいつたので、それに触
れ、すぐに「模範模写^{スキルコピ-}」を使って模写^{コピー}する。

白（これは「蝶化」の能力^{スキル}か。ちつともく使って追いかけなこと）

夜音「待つてよお～」

そういうながら「蝶化」と念じると、黄金の蝶…ではなく漆黒の蝶
になることができたので、ベアトの後を追いかけた。

ベアト「ほんとに貴様は何者なのだ…？」

夜音「気が向いたら教えてあげるよ」